

1. TCS 国際シンポジウム メディア化された身体／引き裂かれた表象——東アジア冷戦文化の政治 Mediatized Bodies/Torn Representations: The Politics of the East Asian Cold War Culture

2021年1月23日、24日 オンライン開催

共催：名古屋大学人文学研究科附属超域文化社会センター

文科省科研費基盤研究 (B)「戦時期における日中映画の越境と協働をめぐる総合的研究」(研究代表者：晏妮)

文科省科研費基盤研究 (A)「建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダ——戦時期からの継承と展開」(研究代表者：星野幸代)



戦時期に抗日／帝国日本プロパガンダを目的として東アジアで発展した、移動する特性を持つ視聴覚メディアと身体表現芸術(演劇・映画・音楽・漫画・舞踊)。それらは、戦後の国際的・政治的大変動と文化人の大移動を経て、いかに冷戦期へと引き継がれ、あるいは変質したのであろうか。本シンポジウムでは、戦前戦中から冷戦期への継承面の検証を意識しつつ、ポストコロニアル中華圏、冷戦期東アジアのトランスナショナルな文化表象と政治、そして冷戦期と重なる戦後日本の文化表象と政治の3つのセッションを通じて、視聴覚メディア／身体表現芸術作品と、その担い手たちの不可視されてきた諸側面を解説し、その意義を議論した。新世代パネルでは4人の若手研究者たちが、近現代の文学や映画における、障がいを抱える人々の身体表象について発表し、活発な議論を行った。

1月23日[土]

●セッション I

【ポストコロニアル中華圏の断絶と連続性】

松浦恆雄(大阪市立大学)

建国後の越劇とメディア創出

森平崇文(立教大学)

上海ラジオスターたちの1949年——湯筆花、筱快樂、范雪君

西村正男(関西学院大学)

戦中戦後の日本における中華系音楽家

三澤真美恵(日本大学)

「戦後」台湾映画における二つの連続性——林搏秋と白克

ディスカッサント：張新民(大阪市立大学)

司会：晏妮(日本映画大学)

●新世代パネル

【身体を生きる／身体を越える——表象される「障がい者」】

王紫涵(ノースイースタン大学)

1949年から1976年にかけて中国で流行した「医学奇跡」言説——身体、中医学そして革命

松本拓真(立教大学)

「三角形」の「かたち」、「障がい者」を含む家族の「かたち」

——大江健三郎「父よ、あなたはどこへ行くのか？」論

曹榮駿(名古屋大学)

津島佑子『狩りの時代』試論——動物的な身体性と感覚の復権を図る神話的思考

王馨怡(名古屋大学)

身体と情動——現代日本映画における障がい者表象

ディスカッサント:長山智香子(早稲田大学)

司会:杉山雅梨華(名古屋大学)、陳敏(名古屋大学)

1月24日[日]

●セッション II

【冷戦期の文化表象と政治性(1):トランスナショナル】

北村洋(ウィリアム&メアリー大学)

青い目の芸者と毛沢東——錯綜するハリウッドと冷戦期東アジアについて

蘇濤(中国人民大学)

在历史的旋渦中前行——岳楓的滬港电影生涯

イ・ヒャンジン(立教大学)

冷戦の境界を越えるポストナショナル——北朝鮮の国際合作ベンチャー

ディスカッサント:馬然(名古屋大学)

司会:藤木秀朗(名古屋大学)

●セッション III

【冷戦期の文化表象と政治性(2):戦後日本】

朴祥美(横浜国立大学)

戦後日本の文化政策と大衆芸能

河西秀哉(名古屋大学)

冷戦とうたごえ運動——歌われる歌の分析を中心に

山本昭宏(神戸市外国語大学)

冷戦下の「やくざ映画」にみる在日朝鮮人表象のポリティクス

——『男の顔は履歴書』(1966年)を題材に

ディスカッサント:川崎賢子(立教大学)

司会:韓燕麗(名古屋大学)

●総合討論

司会:小川翔太(名古屋大学)

2. TCSセミナー



第12回
2020年9月25日

「Politics of Sound: Cinematic Soundscape and Social Mobilization」

会場：オンライン (Zoom)
講師：張冷 (ニューヨーク州立大学パーチェイス校)
挨拶：藤木秀朗 (名古屋大学)
企画・司会：王馨怡 (名古屋大学博士前期課程)

3. 第7回名古屋大学・台湾大学大学院生研究交流会 「人文学諸課題へのアプローチ」

2020年12月4日 会場：オンライン



江山 (名古屋大学人文学研究科日本文学化学博士前期課程)
「理想」の結婚の力学：『あはれ人妻』をめぐる
コメント：洪慧君 (台湾大学日本語文学系副教授)

勝部美星 (名古屋大学人文学研究科日本文学化学博士前期課程)
抵抗を読みとく：森茉莉「恋人たちの森」の同性愛表象
河西秀哉 (名古屋大学人文学研究科日本史学准教授)

徐柏茵 (台湾大学日本語文学系碩士班)
コーパスから見える「やばい」の意味とその変遷
コメント：杉村泰 (名古屋大学人文学研究科日本語教育学教授)

王馨怡 (名古屋大学人文学研究科映像学博士前期課程)
現代日本映画における障害と健常の境界線
コメント：曹慧惠 (台湾大学日本語文学系副教授兼日本研究中心執行委員)

趙君敏 (台湾大学日本語文学系碩士班)
現代日本製大衆薬における商品名の一考察：音韻構造の観点から
コメント：宮地朝子 (名古屋大学人文学研究科日本語学教授)

大江美津子 (名古屋大学人文学研究科ジェンダー学博士後期課程)
語りの携帯から見るホステスの自己語り
コメント：田世民 (台湾大学日本語文学系副教授兼日本研究中心執行委員)

4. オンライン映画上映と監督との対話シリーズ:規範的境界を問う —グローバルな文脈におけるジェンダー、身体とアイデンティティの再検討

後援:名古屋大学GRLジェンダー研究集会



Series No.1 2020年11月2日-6日

Cinema, LGBT Activism, and Queer Sex(u)ality in China into the New Millennium: A Dialogue with Independent Filmmaker, Writer, and Activist FAN Popo, with Guest Speaker Dr. Kubo Yutaka (Kanazawa University), moderated by MA Ran (Nagoya University)

Online Film Screening of *The Drum Tower* (short, 2017) and *Mama Rainbow* (documentary, 2012): November 2-6



Series No.2 2020年11月20日-30日

Gendered Memories and Voices of World War II

Online Film Screening of *Yesterday Is Now* (aka. 歴史の傷跡 / *Wounds of History*, 2002)

Director's talk with Dr. Chikako Nagayama, Nagoya University



Series No.3 2020年12月14日-18日

Gender, National Identity, and the Essayistic Filmmaking in Contemporary Vietnam: A Talk with Filmmaker and Artist Nguyen Trinh Thi

Online Film Screening of *Eleven Men* (2016), *Letters from Panduranga* (2015), *Vietnam the Movie* (2016)

5. グローバル・ライブ・シンポジウム 「多様な観点からの日本映画」

主催：名古屋大学文学研究科映像学分野・専門、ウォリック大学映画テレビ研究学科
協賛：名古屋大学文学研究科附属超域文化社会センター
後援：名古屋大学、文部科学省「スーパーグローバル大学創生支援」



日本映画をテーマにした、脱中心的でヴァーチャルなグローバル・ライブ・シンポジウム。2020年に刊行された二冊の共編著書——*The Japanese Cinema Book* (BFI)と*Routledge Handbook of Japanese Cinema* (Routledge)——の執筆者を中心に27名の研究者が世界各地から集結し、6つのテーマごとにセッションに分かれてワークショップを行った。また、ワークショップと双璧をなす企画として、大学院生たちのキュレーションによる映像作品シリーズも配信した。

●I メディア化と美学 司会：朱宇正

トーマス・ラマール (シカゴ大学)
合成と切り換え——アニメの間メディア史

ヨハン・ノルドストロム (都留文科大学)
サイレントとサウンドの間——「サウンド版」の闊空間

レイナ・デニソン (イースト・アングリア大学)
映画のマンガ——アダプテーションと間テキスト性

草原真知子 (早稲田大学)
写し絵——プレ・シネマ的映写実践としての幻燈

梶川瑛里 (名古屋大学・ウォリック大学)
1980年代アイドル——有名性、メディア、視聴覚性

●I 文化とポリティクス 司会：長山智香子

ダイアン・ウェイ・ルイス (ワシントン大学セントルイス校)
革命のホームムービー——戦間期におけるプロレタリア映画制作とカウンター動員

洞ヶ瀬真人 (名古屋大学)
学生運動映画——対話的アプローチ

アレックス・ザルテン (ハーバード大学)
「アマチュア」映画とマンガのメディアモデル

レイチェル・ハッチンソン (デラウェア大学)
教育としての検閲——映画の暴力とイデオロギー

ジョエル・ネヴィル・アンダーソン (ニューヨーク州立大学パーチェス校)
画面の向こうを指さすこと——3.11三重災害後のアーカイブ化、監視、アトム化

●III 現前と表象 司会: アラステア・フィリップス

ジェニファー・コーツ (シェフィールド大学)

ヤクザ映画——「民衆によって確証された」ジャンル

マイケル・クランドル (ライデン大学)

怪奇映画の亡霊

朱宇正 (名古屋大学)

分離と接続——昭和30年代の映画的家庭

木下耕介 (群馬県立女子大学)

多視点のナラティブ——『羅生門』(1950) から『告白』(2010) へ

●IV 制度と実践 司会: ジョアン・ベルナルディ

上田学 (神戸学院大学)

空間と上映——映画興行の歴史

谷川建司 (早稲田大学)

輸出コンテンツとしての怪獣映画——日本映画輸出振興協会再考

羽鳥隆英 (早稲田大学)

撮影所からの「逃亡者」——池部良、佐田啓二、1960年代初期の映画からテレビへの移行

叢農 (マギル大学)

「正確な音声」を歴史化する——声優、視聴覚の一致、メディア環境

●V 枠なき日本映画 司会: 小川翔太

宮尾大輔 (カリフォルニア大学サンディエゴ校)

撮影法の環太平洋史

馬然 (名古屋大学)

映画祭の裏返し——日本映画と映画祭プログラミング

山本直樹 (カリフォルニア大学サンタバーバラ校)

ソヴィエト・モンタージュ理論と日本の映画批評

テヅカヨシハル (駒澤大学)

眼差しの布置——ヨーロッパと日本映画史

クリストファー・M・カブレラ (名古屋大学)

コンタクト・ゾーンとしての小笠原諸島——『潮の狭間に』(2018) とシティズンシップ

●VI 多様な観点 司会: 馬然

藤木秀朗 (名古屋大学)、アラステア・フィリップス (ウォリック大学)

The Japanese Cinema Bookについて

ジョアン・ベルナルディ (ロチェスター大学)、小川翔太 (名古屋大学)

Routledge Handbook of Japanese Cinemaについて